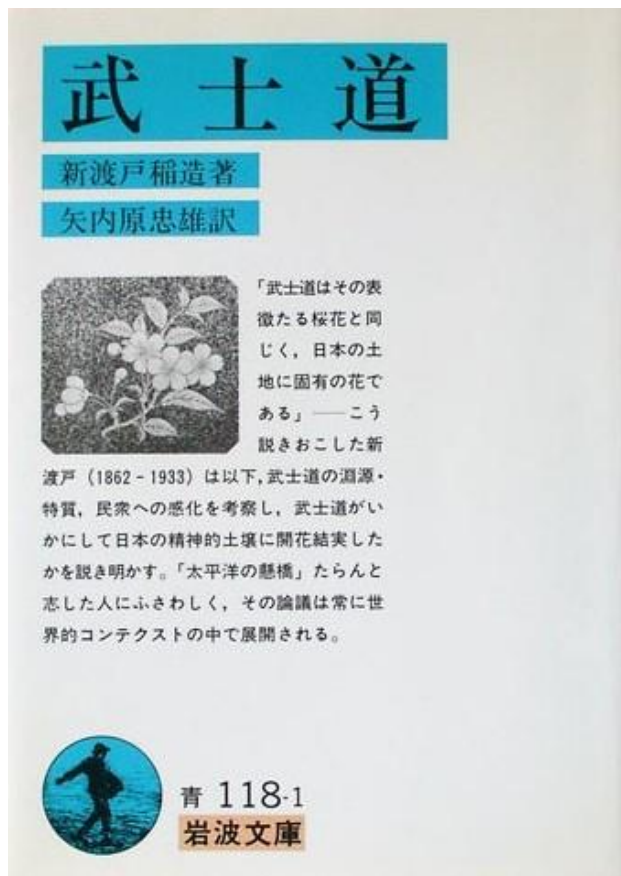
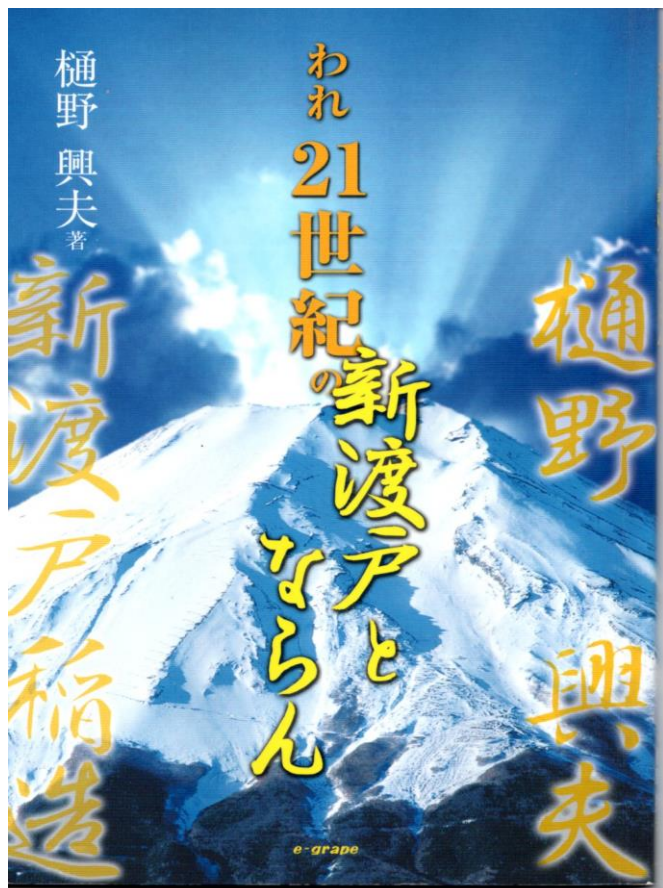


『良書を読み、心の蔵を豊かにする』 ～ 他人の感情を尊敬する ～

2025 年 10 月 30 日 新渡戸稲造記念センターから順天堂大学に寄った。筆者は、アメリカの Fox Chase Cancer Center の Knudson 博士(1922-2016)の下で『遺伝性腫瘍』を学んだ(1989-1991)。そして、『癌研究所所長：菅野晴夫(1925-2016)先生』に癌研究所実験病理部部長(1991-2004)に呼ばれ帰国した。原田明夫(1939-2017)検事総長とは【『新渡戸稲造(1862-1933)武士道 100 周年記念シンポ』(2000 年)、『新渡戸稲造生誕 140 年』(2002 年)、『新渡戸稲造没後 70 年』(2003 年)、順天堂大学教授に就任し、国連大学で『新渡戸稲造 5000 円札さようならシンポ』(2004 年)】を企画したものである。

筆者は 2001 年から『がん哲学』を提唱し、最初の著作は『われ 21 世紀の新渡戸とならん』(2003 年 11 月 10 日発行:イーグレープ 発売:いのちのことば社)である(画像)。2007 年『東久留米のインターナショナルスクール(CAJ)』で、新渡戸稲造著『武士道』、内村鑑三(1861-1930)著『代表的日本人』の読書会を始めた(画像)。【『良書を読み、有益な話を聞き、心の蔵を豊かにする』(新渡戸稲造)】の実践である。2008 年 1 月順天堂大学の病院の診察室で、無料の『がん哲学外来』を始められ、2008 年秋 院外での『がん哲学外来』もスタートした。

筆者は、2019 年 3 月 31 日 順天堂大学教授定年退職し、2019 年 4 月 1 日から『がん哲学外来 in 新渡戸稲造(1862-1933)記念センター』が設置され『新渡戸稲造記念センター 長』を仰せつかった。『新渡戸記念中野総合病院だより』には、【『新渡戸稲造記念センター』の樋野興夫センター 長が全国に展開している『がん哲学外来』が当院でも開設されています。『がん哲学外来』は『がん』にまつわる様々な悩みを 樋野興夫センター長との対話を通して解消する外来です】と心温まる励ましの紹介がなされている。ただただ感謝である。『新渡戸記念中野総合病院』の理念は【新渡戸稲造博士の精神(誠意と思いやりの心)を基にした医療を誠実に実践し、疾病を抱えた人を真心で支援する。】と謳われている。まさに【Union is Power(協調・協力こそが力なり)であり 優雅な感情を養うは、他人の苦痛に対する思いやりを生む。しかして他人の感情を尊敬することから生ずる 謙遜・慇懃の心は礼の根本をなす】(新渡戸稲造)の原点回帰である。



特集 この夏の一書

揺らぐ日本を思い、骨太に読み切る

代表的日本人

内村鑑三 著
(岩波文庫)

推薦者：樋野興夫氏
順天堂大学医学部病理・腫瘍学講座教授
NPO法人がん哲学外来理事長
「21世紀の知的協力委員会」議長

がん細胞から人の生き方を学ぶ。そしてがん患者をはじめとした人間との対話。それが樋野興夫氏の実践するがん哲学外來だ。全国各地で講演会やメディカルカフェを開き、闘病する患者や家族、医療関係者などがやってくる。

樋野氏は、がん細胞を観察・研究してきた病理医だが、それとともにおそらく国内でも屈指の内村鑑三、新渡戸稲造らの研究家であり、実践家である。何しろ患者との対話で次から次へと紡ぎ出される言葉の数々は、それら内村鑑三、新渡戸稲造らの著作にある一文、一文を血肉としてきたものなのだ。

「若いころから恩師に、毎日寝る30分前には医療と関係のない書物を読みなさいと言われ、実践してきた。もう40年になる」

樋野氏が待参した内村鑑三著の「代表的日本人」を見てみると、行間は樋野氏が書いたボールペンの文字で埋め尽くされている。読書しながら思索を重ねてきた証だ。色が違っているのは、読み込んだ回数を表している（写真参照）。

「代表的日本人」は、果てしなく西欧化の道を突き進む明治期にあって、西欧の真似をする日本とは何なのか。それを受け入れてい

る自分とは何者なのか。そう自問自答した内村鑑三が、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人という5人の偉人の生涯を紹介しながら、日本的な道徳や倫理の美しさを切々と説く。初版は英文で発表され、各国で翻訳された。

「東日本大震災や原発事故を経て、日本という国自体が揺らいでいる。そんなときだからこそ、ぜひ読んでほしい1冊だ」

内村鑑三だけではない。1933年3月、三陸で地震の大災害があった。被災地である宮古市などの沿岸部を訪れた新渡戸稲造は、惨状を目の当たりにし、「協力こそが力なり」と語ったとされる。

「まさに今に生きる言葉である。今、新渡戸稲造が生きていれば同じ行動、同じ発言をしたらろう」と樋野氏は言い切った。

時は違えども、現在の状況は、内村鑑三、新渡戸稲造が生きた明治中期に似ているようだ。そのと

きに、日本を愛い、生き抜いた思想家たちの片りんに触れ、自らの生き方を見つめ直す。そんな骨太な夏であってもいいかもしれない。